

連載 46 伊丹万作監督『赤西蠣太』(1936年)

『赤西蠣太』は猫映画でもある。冒頭近く、ショパン前奏曲「雨だれ」が流れるなか、白い仔猫が忍びこんでくる。主人公赤西蠣太の居所の天井で猫が鳴く、蠣太もその声にはりあって濁声でにゃあという。トーカーならではの応答である。襟首をつかんで、よその部屋のまえに連れていく。その部屋の主がまた猫の襟首をつかんで蠣太の部屋のまえに連れてくる。右往左往。反復。ちょっとアメリカのスラップスティック・コメディの味がある。結局、蠣太がもらいうける。

猫に名前はない。登場人物には、水の生き物にちなんだ奇妙な名前がつけられている。蠣太、青鮫鱒次郎、小波、沖の石、安甲、鱧平、貝之丞、鱈之進……。

原作は志賀直哉の短篇小説。物語は、伊達家仙台藩のお家騒動をふまえている。志賀直哉は講談を参照したという。謀反をくわだてた原田甲斐のもとに間諜として送り出されたのが赤西蠣太、これは志賀のオリジナル・キャラクターである。使命を果たして姿を消す口実に、腰元の小波に付け文をして振られたことにしようとするが、案に相違して小波は蠣太をにくからずおもっていた。

蠣太が醜男で知られている、にもかかわらず、というのがツボである。しかもその醜男の蠣太と悪役・原田甲斐の二役を、大スター片岡千恵蔵が演じるというのが映画の仕掛けである。原田甲斐を演じているとき



伊丹万作



片岡千恵蔵一人二役(赤西蠣太・左と原田甲斐・右)

の片岡千恵蔵は白塗り、歌舞伎風の大芝居でにらみをきかせている。

岸松雄はこの作品の興行価値について「志賀直哉の短篇小説に取材したと云ふ一事は、菊池寛の連載小説を映画化したやうに有力な興行価値にはならぬ」と前置きしつつ「内容はユウモラスなものだから、見る人は誰も笑はう。学生客、知識層には無条件で向く」(「主要映画批評」『キネマ旬報』1936年6月21日)と述べた。

辻久一は「昭和十一年度優秀映画銓衡録」(『キネマ旬報』1937年2月11日)でベストテンの一位に「赤西蠣太」をあげ、百点を与えた。澤村勉は九十五点を与えて一位にあげた。「日本映画に稀な理智が、作品の底を貫いてゐる」と評している。北川冬彦も九十五点で一位、「落ちつきと気品」を評価した。

ユーモアと理智、落ちつきと気品は、これに続く戦争の時代のあいだに伊丹万作をささえた力だろう。戦争が終わり、伊丹万作は「ただ偶然のなりゆきから一本の戦争映画も作らなかつたというだけ」だと苦く自己をかえりみた。

さて、多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。みながみな口を揃えてだまされていたという。(略)しかもそれは、「だまし」の専門家と「だまされ」の専門家とに劃然と分れていたわけではなく、いま、一人の人間がだれかにだまされると、次の瞬間には、もうその男が別のだれかを

つかまえてだますというようなことを際限なくくりかえしていたので、つまり日本人全体が夢中になつて互にだましたりだまされたりしていたのだらうと思う。(略) つまりだますものだけでは戦争は起らない。だますものとだまされるものとがそろわなければ戦争は起らないということになると、戦争の責任もまた(たとえ軽重の差はあるにしても)当然両方にあるものと考えざるを得ないのである。(伊丹万作「戦争責任者の問題」『映画春秋』1946年8月号)

だまされたといって、自分は被害者であり、自分には責任はないという弱い大衆のなかから、再び草の根の軍国主義がたちあがるだらうことを、伊丹は予見していた。1946年9月21日に鬼籍に入った彼の、未来への遺言である。